

雨ニモアテズ

◇ まず、次の詩を読んでみてください。

雨ニモアテズ 風ニモアテズ
雪ニモ 夏ノ暑サニモアテズ
ブヨブヨノ体ニ タクサン着コミ
意欲モナク 体カモナク
イツモブツブツ 不満ヲイッテイル
毎日塾ニ追ワレ テレビニ吸イツイテ 遊バズ
朝カラ アクビヲシ 集会ガアレバ 貧血ヲオコシ
アラユルコトヲ 自分ノタメダケ考エテカエリミズ
作業ハグズグズ 注意散漫スグニアキ ソシテスグ忘レ
リップナ家ノ 自分ノ部屋ニトジコモッテイテ
東ニ病人アレバ 医者ガ悪イトイイ
西ニ疲レタ母アレバ 養老院ニ行ケトイイ
南ニ死ニソウナ人アレバ 寿命ダトイイ
北ニケンカヤ訴訟(裁判)ガアレバ ナガメテカカワラズ
日照リノトキハ 冷房ヲツケ
ミンナニ 勉強勉強トイワレ
叱ラレモセズ コワイモノモシラズ
コンナ現代ッ子ニ ダレガシタ

そう、宮沢賢治の「雨ニモマケズ」のパロディー版ですね。これは、あるお医者さんが、知り合いの校長先生がつくられたものを、賢治の故郷の岩手県の盛岡の小児学会で披露されたものだそうです。

読後は何とも言えないやりきれなさでいっぱいになりました。見事に現代を風刺しているからです。作者は、現代っ子はこうした恵まれた生活環境で大切に育てられ、肥満児を生み出し、意欲も体力もない子どもにしまっているとも言いたかったのでしょうか。

学校の授業が終われば塾に追い出され、暇と時間があればテレビゲームに夢中になり、寝不足と運動不足も重なって「朝からあくびをし、学校での集会があれば貧血を起こして倒れる子どもたち」。そして「あらゆることを自分のためだけ考えて省みず、注意散漫すぐに飽き」と、教育現場の乱れを見事に風刺しています。

◇ 私たちにも「こんな子どもに誰がした」と言われた時期があると思います。それは、社会一般の姿として、日本経済が発展だけを優先したばかりに何かを忘れていつている姿です。これは日本だ

けでなく世界中に当てはまるかも知れません。

また、家庭に目を向けると、保護者の子育ての傾向が大きく2つに分かれるような気がします。1つは「子どもの自主性に任せる」という名のもとに、どちらかという『放任型』の姿勢、かたや「子どもは大人（親）がしっかりと育てないと」ということでの『保護型』です。もちろん子どもの性格や環境などがそれぞれに違いがありますので、どちらが良くてどちらが悪いというようなことは一言では言えませんが、いずれにしても、これが極端に偏ってしまっているのが問題であるように感じてしまいます。

このように、社会の変化や家庭教育のあり方に問題の原因を求め、「これは社会が悪い！ 家庭が悪い！」と言ってしまうことも考えられます。しかし、教育の現場である学校はどうなんでしょう。教育は「知・徳・体」のバランスが重要だと言われながら、本当にそういう教育ができているのでしょうか。この詩が、そういうことをもう一度考えてみるきっかけになるんじゃないかなと思い、紹介してみることにしました。

文責 スギタ